

我目分明記

十九代
久基製

全

西之表市立図書館

刊行のことは

西之表市立図書館長 河東 勝

昭和五十八年度図書館事業の一つとして、ここに郷土資料集「我目分明記」を刊行することとなりました。刊行のねらいは、資料の保存と、多くの人達に利用して戴くためですが、保存の面から云えば原本とその儘複製するのがぞましいものの、草書、くずし字等利用の側からは不便であります。従って楷書に書直したうえ紙数も節約することとしました。

読み易さということから読下し文に、とも考えましたが、原本を尊重すること、皆ごんに少しでも古文書に親んで戴く手がかりの意味をも含めて漢文体原文の儘としました。又、文中「被仰付」「被仰附」の付、附のように用字の不統一のところか、異字体、例えば元録の録のような場合も原文のまま、としました。たゞし、句点は校閲とともに平山先生にお願して当方が付したものです。

各位のご高批と今後の資料集に対する要望等お聞かせ下されば幸いに存じます。

我目分明記について

図書館協議会委員 平山武章

私が「我目分明記」という書名を知ったのは、滿洲から引揚げ後で、「種子屋久先賢伝」の、種子屋久基伝を見たときであった。その中に「施政の参考すべき事項は細大洩さず、統計表のごときものを座右に供せられたり」とある。

本の紹介記事としてはあまりにも簡単であるが、強く興味をそ、われ、必見の書として脳裏から離れたことはなかった。しかし御館の原本を見る機会には仲々めぐまれず、時を逸した感であった。

二十年ぐらい前であったが、県立図書館に郷土史関係の本の閲覧に通った折、昭和二十年写しの岩永氏の写本「我目分明記」を見て、この機をのがしてはならぬと決心した。そしてすぐ筆写にかゝったが、これだけでも相当の時間がかかるという見込みで、とりあえず三十五ミリフィルム二本に納めた。たゞ用意不足で、自然光の中での撮影だったため、ピントがあまく、コントラストも弱いという難点をもつ、不本意なものであった。

私はこのフィルムを、十倍のルーペで幾度繰返して読んだことであろうか。虫喰いは無いというものの、写字の書き癖、音訓の使いわけ、借字など、解説には相当に苦勞したが。

さて、種子島には「懐中島記」と「方角乱帳」という二種類の座右便覧がある。

前者は元録二（一六八九）年、上妻隆直の編集。後者は元録十一（一六九八）年、編者はこれも恐らく、家譜編纂にたずさわった上妻隆直と考えられる。

内容は、前者は比重を島政において編纂されたもの、後者は、里程・人口に比重をおいて島勢に関する記述といえよう。

この二書に比較すると、「我目分明記」はかなり性格が異なる。

それは、編者・種子屋久基が才十九代の種子島々主であり、そして薩藩の家老座にあって、農林・通産・経済面に深くたずさわった人物だということにどゞまらず、記録好きという天与の資質による点が大いと思われる。

この度、西之表市立図書館から、郷土史料編として、この「我目分明記」が刊行されるに

当り、その枝間を依囑されたので、まず、御館の原本と岩永写本を比較したが、相違点では「神社佛閣寺院并門主之事」では、岩永本では

国分鷲峯山遠寿寺

高圓松竜山本永寺

右の二寺の記事が脱落していることが見付かった。

さて「我目分明記」の内容についての特長であるが、まず、社会経済史的に、極めて貴重な記録に富むことである。

(三)

たとえば、鹿見島から江戸に上る道程として、細島に出て、海路大阪に行き、そして東海道を行くコース。あるいは、小倉、下関を経て、中国道から東海道を行くコースなど、それぞれの日程、旅費などの詳細。

一例をあげると

鹿見島↓細島 二日半、四匁五分、

細島↓大阪 船十二日半、五匁八分。

大阪↓江戸 七日、八十四匁四分三厘

とか。

小倉と下関、すなわち関門の渡船料が、

小舟一、水夫三、四匁五分

など。

あるいは旅程記事の中に、急料、中急料、早追料、静料などの用語があるが、思うに、急料（いそぎりよう）は急行料金か、そして中急料は、その上か下か。早追（はやおい）料は、特急料金にあたるのではあるまいか。静料は、船待ち、川どめなどによる、予定より滞在が延びた場合ではあるまいか。

(四)

独断的に言うと、鹿見島、江戸間の日程は二十二日間というのが、いわば普通の道中だったので、二十二日以上になると静料をみなければならぬ。これを大急ぎで二日も縮めるとなると、船なり、駕籠なり、馬なり、それなりの手当料が要るはずで、それが急料とか早追料として、加算されるべき費用だったのではないかと思われる。

さらには、長野金山や芥ヶ野金山の詳細な記述があるが、発見、採鉱、採鉱、産出量などの克明な記述もさることながら、物語性も捨てがたい魅力がある。

または、江戸の金座、銀座での、新貨幣の吹替えがあった際の、旧貨との両替の比率なども、薩藩の対応の姿勢がうかがわれるようで貴重である。特に慶長判の価値は、時代をこえて高い価値、信用性を持っていたことをしめし、金の含有率に民衆が如何に敏感であったか、これは当時の幕府への信用性の表現でもあろうか。

他にも例をあげるときりがないが、特産物について拾い出してみると、他國に出さざる品物として、その中に

(五)

ツク綱、ツク

というのがある。

種子島の地方名で、^{いゆる}棕櫚をツグというが、これから考えて、ツク綱はつぐ繩と考えられる。では、薩藩では何時ごろから棕櫚栽培が行われたのか、ひいては、種子島では、などの疑問もおこってくる。とまれ、まだ大量には生産できなかったのか、または専売品としての利益

をはかったのか。

水に強い棕櫚製品が、錨綱やその他船具・漁具として、他國の羨望の特産品だったらしいことは想像できる。

また、草(からむし)苞(あぶらがや)蕉(きあさ)などの名もあり、生蠟・臘などととくに、薩藩の産業の特異な面を見ることができるとくに、この蠟の生産は久基の着眼によるものであったことを特記したい。

榊林こと久基が、島主として、また薩藩家老として、質実・剛健を生活の信条としたことは有名である。彼が、二男、三男の結婚について、費用の節減、儉約にどれほど苦慮したか、あるいはその結婚観は、など、実に多くの示唆にとむ内容であることを述べ、御通読、御治用を御願いする次第である。

(六)

後白河院御位牌
御位牌志
全

御先祖様御實名并御俗名御法名

一 忠久公 御元祖

鳥津元兵衛

一 忠義公

三郎兵衛尉、修理亮、大隅守、御法名号道佛

一 久經公

下野守、豊後守、修理亮、御法名号道忍

一 忠宗公

下野守、御法名号道義

一 貞久公

上総助、御法名号道整、忠久公より貞久公迄御位牌浄光明寺に御安置、高四百石

一 氏久公

陸奥守、修理亮、越前守、三郎、三右衛門尉、御法名号岳玄久、御位牌志布志即心院

御安置 寺高五拾石

一 元久公

陸奥守 御法名号玄忠忍新 御位牌福昌寺江御安置

一 久豊公

陸奥守 修理亮 御法名号義天存忠 御位牌惠燈院江御安置 寺高百七拾石

一 忠國公

修理亮 陸奥守 御法名号玄誓大岳 御位牌源國院江御安置 寺高七石

一 立久公

修理亮 陸奥守 御法名号玄忠節山 御位牌興國寺江御安置 寺高貳百石

一 忠昌公

修理亮 陸奥守 御法名号源整圓室 御位牌興國寺江御安置 寺高貳百石

一 忠治公

又三郎 御法名号蘭窓 御位牌吉田津友寺江御安置 寺高拾石

一 忠隆公

又六郎 御法名号興岳 御位牌隆盛院江御安置 寺高六石

一 勝久公

又八郎 八郎左衛門尉 修理大夫 御法名号大翁妙蓮 御位牌隆盛院江御安置

一 貴久公

三郎左衛門尉 修理大夫 從五位下 陸奥守 入道名龍伯齋 御法名号良等大中庵 御

影南林寺江御安置 寺高四百六石

一 義弘公

又四郎 兵庫頭 從五位 從四位下 宰相 入道名惟新 御位牌伊集院妙圓寺江御安置

寺高三百七拾五石

一 久保公

又市郎 御法名号怒参号一唯 御位牌谷山皇德寺江御安置 寺高三百石

一 家久公 初号忠恒

又八郎 陸奥守 薩摩守 大隅守 少將 中將 宰相 位三位 中納言 御法名慈眼院
殿華心琴月大居士 御位牌福昌寺 江御安置 寺高千三百五拾石

一 光久公

又三郎 薩摩守 大隅守 侍從 少將 中將 從四位下 御法名寬陽院殿恭雲慈温大居士 御位牌福昌寺 江御安置

出水之郡

一 木牟禮城

出水内山門院

右城地文治二年 忠久公始而薩陽曰三州守護職 而御下向之節 被成御座候 二代忠時公

三代久經公 四代忠宗公 五代貞久公迄御居城 而御家最初之地 而候

一 知色城

右 貞久公御代文和三年六月 師久公知色和城御責被成候 此時師久公被蒙御疵候

一 尾崎城

凶徒和泉和色彦三郎入道行覺楯籠候処 文和三年六月十三日 師久公尾崎城御責落被成候 味方勢被入替之處 牛屎左近將監高元 肥後羣比凶徒等 和泉之御敵相加リ師久公

御陳江 押寄合戦候

一 薩摩大隅両国 日向諸縣郡高六拾萬五千餘石

外二

琉球高拾貳萬三千七百石 諸嶋拾五嶋 合七拾貳萬八千七百石

右寬永十一年八月四日於京都御頂戴

家光公御判物

一 其後寬文四年四月五日御判物御頂戴

家綱公御判物

其後貞享元年九月廿一日御判物御頂戴

綱吉公御判物

合高七拾貳萬九千五百石餘

内

五拾六萬五千五百石餘 諸給地高

拾六萬四千石餘 諸御倉入高

右御倉入之内を以諸拂方

一高三萬貳千七百石之所務

御参勤御道中御船中萬入用

一高貳拾萬六千參百石之所務

御在江戸中萬入用

一高壹萬石程之所務

京都御裏方御入用 御藏方御究者無御座候ニ付先大底之考

一高三千石程之所務

小判三百枚 小判三百枚 小判貳百枚
大閤様 内府様 并 平松様 江 御合力分

一高壹萬千四百石程之所務

江戸京大坂諸切米御扶持米拂

一高五萬五百石程之所務

御國元諸切米御扶持米拂

一高壹萬三千九百石程之所務

御前様 伝證院様 八丁堀三田御渡方用

米九千俵 御前様 米貳千俵 信證様
米貳千俵 八丁堀 小判三百兩 三田
小判百兩

一高三萬八千百石程之所務

京大坂年中諸拂所務

一高拾萬六千百石程之所務

京大坂御借銀利拂 并 年府迄

一高三拾三萬五千貳百石程之所務

御國元諸当用拂

一高七萬石餘

御下屋敷國分與方御高

拂高 合高八拾七萬七千四百斛程

内

十六萬四千石餘

諸御倉入高

十三萬九千貳百石余

諸浮得を以相調候分高此

残而

五拾七萬四千貳百石程

不足高

御國中惣人数

貞享元年子礼改

一男女五拾五萬七千八拾三人

右薩隅日琉球諸嶋迄

内

男四萬九千九十六人

鹿兒嶋中

内

男二千七拾六人

士人躰

男三千三百十貳人

士二男三男

合鹿兒嶋士五千三百八拾八人

一男女拾三萬四千貳百八拾人

右薩州外城

内

男五千五百九拾八人

士人躰

男壹萬千百壹人

士二男三男

一男女拾壹萬七千五百八拾三人

右陽州外城

内

男四千三拾壹人

士人躰

男九千貳拾貳人

士二男三男

一男女五萬四千四百廿八人

右日州外城

内

男三千貳百三拾六人

士人跡

男六千三百五拾六人

士二男三男

合外城士三萬九千三百四拾四人 但 二男三男迄

鹿兒嶋 并外城士惣合四萬四千七百三拾貳人 但 二男三男迄

鹿兒嶋士屋敷數

一 千六百四拾壹ヶ所 但 八百三入

内

五百三拾四ヶ所

上方

八百六拾五ヶ所

下方

神社佛閣寺院 并 門主之事

一 神社四千四百十五座 但 未社除之

一 堂四千四拾六宇 但 諸社本地堂除之

一 寺千八百拾五軒

一 高原霧嶋山善林寺錫杖院神徳院

但 天台宗東叡山末寺

一 坊津如意珠山龍巖寺一衆院

但 真言宗仁和寺末寺廣澤方寺高貳百五拾六石貳斗六升三合六夕八才

一 鹿兒嶋經園山大衆院

但 真言宗三寶院末寺小野方寺高八百八拾石六斗五升六合五夕六才

一 志布志秘山宝満寺密教院

但 律宗南都西大寺末寺高三拾壹斛五斗六升

一 國分梅雲山正國寺無量壽院

但 律宗南都西大寺末寺 高拾四石志斗五升貳合八才

一 鹿兒嶋瑞雲山大龍寺

但 臨濟宗五山派東福寺龍冷庵末寺 高無之 切米拾石御佛儲 并 監司饋用として被下候

住持有之候節者其上被下候不定

一、伊集院泰定山廣濟寺

但臨濟宗五山派南禪寺末寺、高三拾石

一、國分靈鷲山正興寺

但臨濟宗五山派建仁寺末寺、高四拾壹斛貳斗七升貳合壹勺五才

一、野田鎮國山感應寺

但臨濟宗五山派東福寺末寺、高貳石

一、志布志龍興山大慈寺

但臨濟宗關山派妙心寺末寺、寺高四百七拾一石壹斗貳升六合貳才

一、鹿兒嶋玉龍山福昌寺

但曹洞宗能州總持寺末寺、巖山五哲之中道別派下石屋派寺、高千三百五拾石

一、鹿兒嶋養泉山無量寺不斷光院

但淨土宗智恩院末寺、鎮西派寺高貳拾石

一、帖佐如意珠山願成寺

但淨土宗智恩院末寺、鎮西派寺高三拾石

一、鹿兒嶋本長山正建寺

但法華宗本能寺攝州本興寺末寺、高三拾石

一、國分鷲峯山遠壽寺勤持院

但法華宗本能寺末寺、高無之切米八石御佛餉料

一、高園松尾山本永寺

但法華宗房州妙本寺富士川家寺、高無之

一、鹿兒嶋松峯山淨光明寺無量壽院

但時象宗相州藤沢山清淨光明寺末寺、高四百石

一、野田龜翁山西勝院山内寺

但天台宗比叡山末寺、薩州之一寺、高貳百石

一、高原霧嶋山神德院

但天台宗江戸東叡山末寺、日州之一寺、高二拾七斛

一、鹿兒嶋雲海山般若院

但真言宗当山山伏薩隔日叢裝頭

一、大崎飯隈山飯福寺照信院

但天台宗本山山伏薩隔日叢裝頭寺、高四百三拾三石、斗六升、合四勺六才

御領國中他領境目御番所之事

- 出水之内 大口内
- 一、野間之原 一、小川内 一、加久藤 一、須木
- 野原内 高内内 都之域内
- 一、紙屋 一、去川 一、山之口 一、梶山
- 同 志布志之内 志布志之内 上同
- 一、寺柱 一、八郎ヶ野 一、夏井 一、鹿谷

御牧教

- 一、吉野 馬教 百五十足 取駒 二十足 一、福山野 馬教 二百三十八足 取駒 百五十七足
- 一、長嶋野 馬教 八百四十三足 取駒 五十二足 一、瀬崎野 馬教 三百九足 取駒 貳拾貳足
- 一、寺田野 三百四十七足 十九足 一、高牧野 五百六十四足 二拾九足

一、末吉野

三百九十六足 二十二足

一、伊作野

貳百四拾三足 十五足

一、類姓野

九十一足 九足

一、唐松野

一、野間野

八廿五足

一、青山野

六百八十四足

一、笠山野

貳百五十三足

一、高牧野

六十志足

一、青色野

七十七足 三足

一、市来野

三百三十足

一、上觀野

七十五足 貳足

一、下觀野

四百廿足

合牧教 拾七ヶ所

台馬 七千三百九十二足

合取駒 四百三拾貳足

御船教之事

一、御關船 五十艘

但六端帆より十五枚帆迄

内九艘八

鹿兒嶋御船手

四拾壹艘八

久見崎御船手

一 御荷方船十七艘 但六端帆より十六端帆まで

内十一艘ハ 虎見嶋御船手

六艘ハ 久見崎御船手

一 橋船并小船百三拾五艘 但式枚帆五枚帆迄

内五拾九艘ハ 虎見嶋御船手

七拾六艘ハ 久見崎御船手

一 御関船十二端帆一艘

右細嶋江被召置候

一 御関船十三端帆一艘

右大坂江被召置候

一 小早六端帆一艘

一 荷方六端帆一艘

右歌嶋江被召置候

一 御中間百三拾五人 但御扶持取

内七人 御赦免

一 御納戸付御小者七拾七人 但御扶持取

内廿六人 御赦免

一 御納戸付御小者百三拾壹人 但御扶持取

内廿式人 御赦免

一 御足輕五百拾五人 但御扶持取

内三拾式人 御赦免

他國江不出品々

一 鉄砲 一 塩硝 一 刀 一 数寄屋道具 一 懸物 一 棕栢竹 一 琉球焼酎 一 蕨鉄 一 蘭

一 賣人 一 霧嶋躰踏 一 サク口木 一 唐桐 一 琉球草木色々 一 古焼物 一 御國白焼其外焼物

一 硫黄 一 蠟 一 棕栢皮 一 ツク綱并ツク 一 馬ノ尾 一 樟腦 一 漆 一 芭蕉布 一 菅苞蕉

一 上布 一 大豆 一 雜穀 一 藻玉 一 鍋地金 一 鈴 一 明礬 一 鍋 一 下布 一 葺板

一、ホラノ貝 一、屋ニ貝カク 一、いたウ貝カク 一、小ぬか 一、琉球ツク 一、檜庵樽

宿次外城附

一帖佐 加治木 國分 敷根 福山 都之城 山田 清部 日当山 踊 清水 曾於郡
横川 湯之尾 馬越 大口 山野 栗野 吉松 吉田 馬関田 加久藤 飯野 小林
野尾 紙屋 本城 曾木 羽月 高崎 高原 須木

綾

牛根 重水 新城 大恰良 大根占 小根占 佐多 恰良 高山 内之浦 田代 市成
百引 高隈 鹿屋 串良 大崎 末吉 松山 志布志 勝岡 財部 高城 高岡 倉岡
山口 穆佐 卧地 平嶋 諏訪之瀬 恒吉 口、永良部 口之嶋 悪石 中嶋 宝嶋
御船手 牛根 黒嶋 硫黄

谷山 喜入 指宿 穎娃 山川 竹嶋 川造 山田 鹿籠 坊泊 種子嶋 知覧 歌嶋
屋久嶋 伊集院 市来 串木野 隈之城 日置 吉利 永吉 伊作 田布施 阿多
加世田 秋目 久志 百次 山田 平佐 水引 高城 阿久根 野田 高尾野 出水

高江 長嶋 郡山 入来 山崎 宮之城 出水 樋脇 吉田 蒲生 伊牟田 大村 黒木
佐司 鶴田

六廻文外城附

一谷山 喜入 指宿 山川 穎娃 知覧 川邊 山田 鹿籠 坊泊 久志 秋目 加世田
阿田 田布施 伊作 永吉 吉利 日置 伊集院 市来 串木野
櫻嶋 重水 新城 大恰良 大根占 小根占 佐多 田代 内之浦 高山 恰良 鹿屋
高隈 串良 大崎 志布志

郡山 入来 樋脇 山崎 東郷 中郷 平佐 山田 百次 隈之城 高江 水引 高城
阿久根 野田 高尾野 出水 長崎 吉田 蒲生 伊牟田 大村 黒木 宮之城 佐田
鶴田 曾木 羽月 山田 大口 馬越 湯尾 本城 横川 栗野 吉松 吉田 馬関田

加久藤 飯野

加治木 國分 敷根 財部 都之城 勝岡 山之口 庄内 高城 高岡 穆佐 倉岡 綾
野尻 高原 高崎 小林 須木 帖佐 山田 清辺 日当山 踊 曾於郡 清水 福山

牛根 市成 百引 恒吉 末吉 松山

小倉筋細嶋筋通路之時分覚

一 銀百貳匁六分六厘

内 四匁五分 廣見嶋 与 細嶋 迄二日半旅籠賃

八匁九分 他領都之郡 与 細嶋 迄駄賃

五匁八分 細嶋 与 大阪 迄船中十二日半賦

八拾三匁四分三厘 東海道七日之萬賦

一身下り
一 銀拾四匁

但船中三拾日之賦、西目東目共二船中御賦方迄相替り不申候、中早共三応日数、三拾

日之割を以相渡申候、御国元 与 小倉筋中国筋東目筋江戸迄上下三人静新

一 銀三百廿八匁八分六厘

内 一 銀三百廿四匁三分六厘

内 銀廿七匁三分 小倉道中一人賦

〃 四拾目六分六厘 中国道中右同

〃 四拾目壹分六厘 東海道 右同

右小倉道中中国道中并東海道賦

一 上り小倉正月二月七月八月九月十一月十二月

細嶋三月四月五月六月

下り小倉正月五月六月七月十一月十二月

細嶋二月三月四月七月八月九月

一身上り
一 銀六拾貳匁壹分六厘

内 八匁 他領都之郡 与 細嶋 迄送夫壹人賃金

十四匁 船中三拾日之賦

四拾目一分六厘 東海道萬賦

一身下り
一 銀六拾四匁六分貳厘

右同

東目筋上下中急料

一 身上リ
一 銀八拾貳匁六分四厘五毛

内 五匁九分三厘 他領都之郡与細嶋迄駄賃

六匁三分 鹿兒嶋与細嶋迄三日半旅籠賃

八匁六分貳厘 細嶋与大坂迄船中十八日半賦

六拾壹匁七分九厘五毛 東海道急料

一身下リ
一 銀八拾四匁六分壹厘 右同

東目筋上下早追料

但志人二付百八匁壹分貳厘

一 銀四匁五分 小倉与下関迄船渡

右小船壹艘三人水主船賃時ニ与リ相重リ候儀也御座候

御國元与 小倉道中中国筋右同断上下三人申急料

一 銀四百六拾五匁九分一厘五毛

内 銀四百六拾壹匁四分一厘五毛

内 銀三拾四匁九分貳厘 小倉道中一人賦

同 五拾七匁九厘 中国道中右同

同 六拾壹匁七分九厘五毛 東海道 右同

右小倉道中中国道中并東海道賦

但志人二付百五拾三匁八分五厘

一 銀四匁五分 小倉与下関迄船渡

右小船壹艘三人水主船賃時ニ与リ相重儀也御座候

御國元与 小倉筋中国筋右同断上下三人早追料

一 銀六百三匁

内 銀五百九拾八匁五分

四 銀四拾貳匁五分四厘 小倉道中一人賦

同 七拾三匁五分三厘 中国道中右同

同 八拾三匁四分三厘 東海道右同

右小倉道中中国道中并東海道賦

但 卷人二付百九拾九匁五分

一銀四匁五分 小倉上下関迄船渡

右小船壳艘三人水主船賃時二寄相重リ候儀御座候

一宝永三年戌取納米書出し

現高頭拾九萬貳千八百三拾七斛六斗九升余

但表方拈佐與御新田其外御藏入

三斗三升四合六匁五才代々
酉秋取納米

納米六萬四千五百三拾四斛貳斗壹升餘

右之内飢米御借米延米引

六萬千七百六拾斛五斗貳升餘

但 三斗貳升二匁七才代々廻候

一宝永三戌年書出し御切米并定飯米員數

米壹萬六千三拾五斛

元禄十六未年一年之總リ

一銀三千七百拾三貫四百目

一銀貳千九百七貫百目

一銀貳百五拾貫目

一銀三千三百四拾八貫五百目

合銀壹萬貳百四拾八貫五百目

京都江戸大坂御國御時借銀

一銀四千三百廿貫目

京都年府銀

一同貳千貳百九拾七貫目

江戸京都古御借銀

一同千百六拾貫目

江戸拂

京都拂

大坂拂

御國料

一 米拾式萬斛 但出来米并道之嶋米込下

一 大嶋 廻り五十九里拾丁 鹿見嶋百四拾三里 高 壹萬四千五百廿石壹斗式升九勺五才

一 德之嶋 廻り十七里三丁 鹿見嶋百七拾九里 高 壹萬三千六百九拾九石壹斗九升式合八勺

一 沖之永良部 廻り十里八丁 鹿見嶋百三十四里半 高 五千八百廿八石八斗壹升四合五勺壹才

一 輿論嶋 廻り三里五丁 鹿見嶋百四拾七里半 高 二千四百式石七斗五升九合一勺八才

一 喜界嶋 廻り六里廿丁 鹿見嶋百五十八里 高 壹萬四百八十六石六斗九升壹合四勺三才

合高四萬四千九百三拾七斛五斗七升八合八勺七才

但萬治二年之御竿

一 琉球 嶋廻り七拾五里 鹿見嶋百九拾五里半 高 六萬式千九拾九石六斗壹升六合七勺四才

一 琉球國司領諸嶋高九萬八百八拾三石九斗壹合式勺

一 江戸行船役目 二付積間被下候定

米五石足 但千四百五斤 一石 二付八十壹斤

右御蓮枝方 并御家老

米三石足

右御番頭 并御用人 御留守居

御参勤之節御供立之御船數覺 但御先除

一 御座船式艘 一 塗小早小鷹丸壹艘

一 白小早八端帆三艘 一 塗早崎四枚帆壹艘

一 御引船十端帆式艘 一 水傳間六端帆式艘

一 御湯殿船十端帆壹艘 一 使船三枚帆九艘

一 釣流三枚帆壹艘 一 関十三端帆十五端迄拾九艘

合四拾三艘

一 中兼大祇千三百六拾三人程

一 船頭三拾三人

一 主取拾三人

一 水主千五百九拾六人

宝永七寅正月勘定之表

江戸京大坂長崎御國御借銀高

一 銀壹萬七千五百七貫目

内七百貳拾貫目 江戸

三千七拾七貫目 御國

七千貳百貳拾七貫目 京都

内千八百貫目 年府

但一年二六百貫目ツ、御出

四千九百六拾貫目 大坂

千五百拾七貫目 長崎

但替し銀

御國行賦

一 主従三拾五人 兼馬壹足 遠方

萬斛以上 御家老

廿四人 近所

一 主従貳拾三人 兼馬壹足 遠方

拾五人 近所 若年寄

一 玉金五拾六貫六百目 諸金山 一年分

一 嶋津淡路守殿御家筋者 吉貴公与里七代先之御先祖様、陸奥守貴久公之御次第、嶋津右馬

頭忠将家之次男家ニ而、嫡家者嶋津小源太殿家ニ而候、淡路守殿居城佐土原之城者、前代

与嶋津家領内ニ而、慶長年間龍伯公御甥嶋津中務大輔豊久居城ニ而候処ニ、関ヶ原ニ而豊

久事戦死、以後権現様与リ御意を以、山口勘三衛殿与庄田三太夫与申人を被差下、暫御番

手城ニ而御座候得共、豊久事奉対、権現様無逆意趣達、台聽佐土原之儀、龍伯家久与里親

類之内ニ而、番手可申付旨被仰付候処、慶長六年龍伯公御家中之御従弟嶋津右馬頭征久入

道宗怒事、其節嫡子ニ家督相讓リ隱居ニ而候得共、龍伯様御父子様与里被仰付、二男召列

佐土原城番与相勤、其後龍伯様御父子様与リ、佐土原城宗怒、捍領被仰附度旨御願ニ而、

宗怒与御目見頼ニ而、頼相連慶長八年十月宗怒江佐土原捍領被仰付、御直参ニ被相成候。

宗怒二男右馬忠興ハ、淡路守殿曾祖父ニ而候。

一 嶋津八郎右衛門殿御家者、光久公御代ニ嶋津家之御氏族之由ニ而、系圖被遣嶋津之號許候様ニ被仰達、光久様此御方御系圖志ハ遍被仰付候得共、不相知候得共、八郎左衛門殿嶋津相模守違久子出家いたされ長徳軒ト申候子孫之由相見得候。右に付而ハ此御方古老之申傳候筋も候処、嶋津之号被為名乗候儀、御心次第可被成与被仰達候。

一 一向宗御禁制者、御當國之一向宗者上方筋之宗旨ニ相替リ新宗与申候而、邪法ハ一々障碍をなし、同宗ニ志たし三強ク徒黨を結ビ、君臣之禮を背き父子之分もなく、無作法ニ有之仇をなし候儀或有之、御家御代々御制禁ニ而候。

一 琉球國者御家九代之御先祖、陸奥守忠國公御御忠節事有之ニ付、普廣院殿上里御拝領、永享年中御當家之御幕下ニ而、年々貢物等不怠候処ニ、慶長年中致違背ニ付、権現様江中納言家久公御伺ニ而、御人数差渡さ連、慶長十四年之夏御攻取被成候。

一 鹿兒嶋上里琉球之内、はて類ま迄、海上四百五里、那覇まで式百四拾里。

一 御當家嶋津御先祖者、豊後守忠久公与申候。頼朝公之長庶子ニ而、八歳ニ被成御成候時、

文治二年頼朝公ハ御下文を御賜リ、匿隅日被成御拝領、忠久公御子大隅守忠時公ニ而候、忠時公御子下野守忠久公与里当大守吉貴公まで式拾壹代ニ而候。

一 大平記ニ嶋津上總入道与御座候者、忠久公上里五代、上總介貞久公之御事ニ而候。

一 嶋津四郎与御座候者、板行本ニ有候者嶋津家之人ニ而無之、曾我奥太郎時久与申人ニ而候、其證據者参老大平記ニ見得候、嶋津家之大平記ニ茂、曾我奥太郎時久ト有之候。

一 於日州新納院高城大友家与御合戦、大友家敗軍候、天正六年十一月十二日ニ而候、修理大夫義久公御代ニ而候。

一 肥前嶋原龍造寺山城守高信与御合戦、右之義久公ニ而御座候、大将分ニ而被遣候者、三番目之御舍弟嶋津中務家久ニ而候、隆信と討候者、川上左京久監にて、天正十年三月廿四日ニ而候。

一 豊後利満にて大友家与御合戦、御勝利候も右中務ニ而、天正十四年十二月十二日ニ而候。

一 大関秀吉公薩摩江御入候者、天正十五年四月廿五日ニ而候、泰平寺江御着府候者同月廿八日ニ而候、御先手之衆内小西攝津守、九鬼大隅守殿、脇坂中務少輔殿杯、薩州平佐之、城御

攻候、右城預り植神祇忠筋申_二而候。同州筋惣大将羽柴美濃守殿にて候、御先手黒田官
兵衛殿、宮部善禪坊、曰州目白_与申所まで押入被陣取候、其後安國寺高野木食上人杯噺_二
布和睦_二罷成候、同五月八日龍伯様恭平寺江御出御目見得被成候。

一、高麗_江者兵庫頭義弘公御嫡子又市郎久保公御西人御越、文錄元年二月廿七日栗野御立、出
水_与御出船、名護屋_江御渡、同四月十二日名護屋御出船、同五月三日高麗金山浦へ御着船、
被召列候軍士壹萬餘人、久保公文錄二年九月八日、唐嶋にて御病氣御逝去、依之中納言様
又八郎忠恒公被申候時、同三年八月伏見より直_二高麗_江御渡海、於朝鮮諸將共_二晋州城攻
落、其後從濟表敵方番船破之節_也御粉骨被成、敵船百六拾艘御切取、数千人之首御取候、
且又南原城攻落_也礼候節_也御軍功有之、義弘公御手に首数四百餘御取候、依之數遍之御感
状御給り候、就中慶長三年十月朔日、泗川舊館城_江明兵、式拾万餘寄来候節、被得大勝利首
数三萬八千七百餘御取、其外撃捨不知数由_二候、此御勝利日本惣勢歸朝之節被引取候由、
然處_二霜月十八日、順天在城之諸將小西攝津守行長_と始番船被相圍、被引取候儀不罷成候
処、義弘公御父子立花左近將監殿、宗對馬守殿、寺澤志摩守殿、高橋主膳殿、被仰合番船

被打破候_二付、順天之諸將無異儀被引取候、此時戦死之者許多_二而為有之由_二候、右泗川
為御軍功御官位被仰附、御知行并御腰物御持領。

大閤様薨御之後故五大老様上里之御判形之御感状_二而候。

一、御帰朝者慶長三年_二而候

一、當大守様御名、正四位下左近衛權中將兼薩摩守源朝臣吉貴

一、忠久公始而薩隅日三州之守護職_二而御下向文治二年_二而候、出水木牟禮城_二被成御座候。

一、當御城者慶長七年、家久公山下_二御屋_二起橋_二而御移り。

一、鹿見嶋士人躰 式千四百七拾人

一、右同二男三男 四千九拾壹人

合六千五百六拾壹人

一、外城士人躰 壹萬三千八百四拾三人 但私領除

一、右同二男三男 式萬六千程之賦

惣合士四萬六千五百九拾四人之賦

一 足輕小頭五拾人
一 足輕千百六人

御譜代
内七百廿七人

三百八拾五人 御座

一 御中間小頭拾六人
一 御中間百七拾七人

一 御小者百五拾七人
一 御書院附式拾人

一 御納戸附小頭廿五人
一 足輕式百五拾式人

一 三ヶ國惣人数
元禄十一年庚辰

一 四拾貳萬九千七百六拾式人

一 琉球拾五萬五千百八人
右同

一 道之嶋四嶋四萬九千四百七拾式人

一 三ヶ國百姓廿七萬四千貳百廿三人

一 出物米三万八千八百廿七石九升

御領國名所

薩州出水郡内

一 隼人之瀬戸

隅州国分郡内

一 奈気木之森

同川邊郡内

一 沖之小嶋

同郡内

一 気色之森

同郡坊津内

一 唐之湊

一 南泉院者薩州伊佐郡大願寺 与申候而天台宗之古跡有之候、右大願寺を寛陽院様と公儀江御

願ニ而、御城内と申遍き程之処ニ引移、御宮并御代々様之御位牌を御立置被成候処ニ

地狭く其上差支候儀と申有之、大玄院様より別所へ奉移たく被思召、そ乃く其御年当

され候、近年御成就ニ而御迂宮相調候、吉貴公と上野准后院様へ御頼ニ而、大雄山南泉院

与御改被下候、寺高五百石

一 前方之儀者福昌寺と兼住にて、御法事之時者神徳院戎罷越相勤候。

一 大追物者忠久公於鎌倉被成御誓古、此道専弓馬之故実有之事ニ而、御当家御代々御傳來之

事ニ候、御家督御相續之節者、御代初之犬追物と申候而、必有之事ニ候、光久公御代正保

三年四月七日、於江戸芝御屋敷ニ而、御老中様方御招待ニ而御張行有之、同四年十一月十

三日於王子村御張行有之、大猷院様御覽候。

一、琉球江漂着之唐船前二者、破損不仕節者琉球直二帰帆申付、其首尾江戸長崎江申上候、破損之節者、唐人共長崎江申遣候（共、中山王上里依頼以來、漂着之唐船致破損候而也、直二唐へ送り遣筋二、元録九子年被成御免候、宗門疑敷異國船漂着二而致破損候ハ、異國人并荷物等長崎江送遣候筋二被仰渡候。

一、置米員数三千三百式拾斛

- 一、串木野 一、平嶋 一、高江 一、西方 一、山崎

- 一、白田 一、底嶋 一、大口平出水 一、高橋 一、片浦

- 一、大浦 一、内之浦 一、志布志 一、石山村 一、久志

- 一、泊 一、山川 一、小根占 一、五所村 一、八日町

一、鵜嶋

一、江戸江毎年相廻候米員数、壹萬貳百斛餘、船廿六艘程

一、所高壹萬七千六百三拾貳斛程

出水土八百五拾人 人舩

高六千五百六拾九石程 衆中持高

士惣人数貳千三百八拾四人 男

用夫千三百貳拾七人

一、諸所仕上と新田納米代 私

生臘、臘代年符代

合銀五拾貫目餘丈夫成算用

一、青駄荷 四拾貫目

一、乘掛人夫惣様四拾貫目

一、かり尻 五貫目迄之荷物者不苦候、夫与重三候得ハ本駄賃二相成候

一、人足危人持五貫目

一、長持危竿三拾貫目

五貫目持之賦、人足六人掛り公儀御免

一、銀八百四貫目

公儀御免

右高志樓之時金子ニ志万三千四百
一 同四百貳貫目 公儀御免

右者渡唐金高之内減少候様ニ先年公儀仰渡御座候節、御頼之趣有之、千二百兩之減
少ニ被仰渡、夫以來當分迄、隔年ニ右之銀高被差渡御事之由相見得申候。

但小唐船之年者右之半分、与差渡事ニ候。

一年ハ半分渡候儀、御届為有之事ニ候。

一 桜嶋午年生臘、臘之拳

合拾六萬三千四百五拾六斤半

代銀千八拾六貫九百八拾五匁七分貳厘

内九拾貫百廿貳匁四分貳厘本年用

九百九拾六貫八百六拾三匁三分御利潤占

一 種子嶋、南北拾六里東西一里二里乃至三四里

一 高八千七百廿三斛一斗貳升三合 十八ヶ村

外新仕明高千三百貳拾六石

一 高千五百拾三石貳斗九升三合 御國地

合高志萬千四百七拾七石志斗貳升九合五匁

内四千七百三拾五石志斗九升三合 倉入

三千五百八拾六石三斗八升四合 給地

四百志斛五斗四升六合 寺社領

一 馬毛嶋、南北志里餘東西半里計平地無田畠、本嶋、五里西ニ有漁獵並海草取方五ヶ浦其外浦々々
勝手ニ申付候尤海草ニ塩を取納す

一 嶋主元祖之事

号肥後守信基者、大政大臣平清盛公嫡男安藝判官基盛男、左馬頭行盛之子也。平家没落之

後、北條平時政為養子、在鎌倉、時政以執奏賜種子嶋加傳加領 屋久永長部下領之。元祖信基、信式、

信真、真時、時基、時充、頼時、清時、時長、幡時、時氏、忠時、惠時、時亮、久時、忠

時、迄當久時十八代凡五百有餘年、先此嶋鎌倉御倉入也、地頭大浦口在鎌倉聽夏、上妻氏

為代官在嶋宰稅、又高野入道上郡、野間入道中郡、熊毛入道下郡、以上三郡司入道也。

一 嶋主姓之事

号藤原大浦口姓也、当嶋下向之時、請之改平姓之々

一、嶋主幕之紋之事

三鱗形時政讓也、又龜甲内上羽向蝶大浦口紋、為家吉例年頭鏡式用此紋

一、嶋主重代大刀之事

大刀一腰無銘也、長式尺五寸二分反一寸式分、信基家傳大刀一腰、備前三郎國宗、号松作、長二尺八寸五分反一寸三分、時政讓之太刀也。

一、文和二年八月廿三日、將軍義詮御感状卷通但肥後佐江 近將監

一、應永十五年十月八日、元久公与里、屋久、永良部兩嶋被成下候、御状一通、但肥後近將監江

一、應永十五年十月八日、大主元久公御神文卷通、但肥後近將監入道江

一、永享八年八月七日、薩摩守好久神文卷通、但種子嶋江

一、永享八年八月十日、薩摩守契約状卷通、右同

一、明應六年三月十六日、口宣案一通、左兵衛尉藤原忠時、宣任武藏守

一、永正八年十二月廿九日、大守忠治公御證状卷通、依軍忠被成下候御状也、但種子嶋武藏守

一、天文十年四月七日、口宣案卷通、左兵衛尉平直時、宣任彈正忠

三月五日、近衛閑白植家公御状卷通、但種子嶋彈正忠

一、弘治四年二月十七日、口宣案一通、從五位下平時亮、宣任左近衛將監

一、天正八年十月五日、大守義久公、御諱字御免状一通、種子嶋三郎次郎

一、大守義久公御神文一通

一、永正十年、七島卧地嶋上里、納物日記壹部

一、赤尾木三ヶ寺之事

本寺 瑞陽 本能寺
本興寺

吉祥山 本源寺 菩提所免地 寺領百斛 社領三拾斛
卷反五畝八步 佐牌附式拾斛

釋迦堂 十間 六尺三寸間 厚板葺

祖師堂 六間 右同

社壇 二間 右同

拜殿 三間 右同

方丈 七間七尺 右同 板葺

日蓮大上人曼陀羅一軸

建治三年十月御筆

嶋主十四代惠時奇進天文十八年十月十八日有文書

安國論御書一軸 洛陽宗真筆

当寺十一代日周奇進

寺號額 洛陽宗真筆

主代 嶋津十七代忠時奇進

文明元年草創、開山淨光院日良法印法印開基大檀嶋主十一代時氏、法諱金山院日翁大居士

元錄二年まで二百式拾一年、開山嶋当住日慎二いたり住持十四代、元錄六年造替、願主十

四代時堯、息時次要法院七歳日要而死去為菩提面興、是時移寺地於時堯屋地、至今日元錄六年

百式拾七年、社領三拾斛之事

増田村河上田、十六代久時依心中所願奇進、盡未來際不可変此土地旨、慶長四年正月十

一日有文書。正月廿日、嶋主招請当寺古例也、有勝部式法、各詠歌題寫舊式也、客亭一首

宛至相伴面々

一 信基より七代頼時代、御家之御幕下ニ成候与相見得候、氏久公菊地之御合戦之時、頼時七

人之大将之内ニ被仰付、貞治五年丙午四月十六日、日岡にて戦死、嫡子八代清時ニ、頼時

忠死ニより氏久公より、産州仙台於日破田賜八十町

一 應永十五年十月八日、大守元久公為忠節賞、屋久永良部両嶋を八代之賜清時

一 大守久豊公より、硫黄・竹嶋・黒嶋三嶋を八代賜清時

一 應永三拾年忠國公日州海江田城江御出陣之節、八代清時為軍代、弟因幡守時貞、八月参進

鹿府、于時還参之由御出合有之、難海之故還参之分申上候得と云、右還参ニ依而惠良部を

久豊ニ差上ル

一 同三拾四年正月四日、大守忠國公嶋惠良部嶋を九代之賜時長ニ

一 九代時長代、依護言硫黄・竹嶋・黒嶋被召上

一 十代幡時代八月十日、好久公嶋川部郡七嶋之内、卧地・平嶋賜二嶋、但年号知ず

一十一代時氏代、種子嶋、屋久、永良部同三嶋、日典、日良兩上人之間法談、法華宗_二改_レル

一十一代時氏代、本源寺建立、山号吉祥山、開山日良上人
一文明十七年六月、大守忠昌公、飲肥之伊藤祐國陣_二懸_レ御合戰之節、十二代忠時御供仕、
抽軍忠、忠昌公為御感賞、賜御諱字号忠時、年十八歲時也

一十二代忠時代、三男越前守茂清、蒲生越前守充清家_ヲ繼
一鉄炮渡_リ候事

天文十二年八月廿五日渡_ル、十三代惠時之代也、加賀守意釣、寶永二年まで百六拾一年
一十六代久時代、始而大守義久公於御前、天正七年元服、其前者祖神之於社檀元服

一十六代久時、義久公_ト御諱字_ヲ賜_ス、初克時改久時、但十月五日年号不知
一十六代久時、朝鮮國_江御供仕、義弘公、忠恒公直_二自朝鮮國上洛_一、久時御供、於伏見御家
老職被仰付、致下向候節、於佐多浦賜五百石今、吉田也

一十六代久時代、文錄四年秋所領之地交替_二而_一、種子嶋、家久、永良部三嶋差上_ヲ得領_ス、薩
州内知覽地

一十六代久時代、六月、累代之本領種子嶋由得領

一、同久時代、屋久、永良部兩嶋暫く為御借地

一、光久公より、十八代久時賜御諱字、号久時

一、太守御家与嶋主家縁與之事

勝久公御息女、嶋主十三代惠時室

男子一人出家、勝本院日法、不見系図

日新公御息女、嶋主十四代時亮室、女子三人、一人者伊集院忠棟室、早世。一人者、龍

伯公御兼中、御姫二人。一人、嶋津久仍母、一人、家久公兼中、号國分御前。義久公兼

中時亮息女_{御姫三人}、家久公御息女、嶋主十七代忠時室、女子一人男子一人。嶋主十八代久

時是也。光久公御息女、嶋主十九代義時室

一、種子嶋主水時春家之事

能登守時通嫡女、奉仕龍伯公兼中、称一之臺、賜新地千斛、伊勢長門守貞清二男主人時
盛、為一之臺養生、時盛至當主水時春四代

一、種子嶋内記家之事

嶋津十二代、忠時四男出雲守時述、對家嫡有逆心事被誅。時三歲幼子於里、乳母藏懷中竊出此嶋、住國府。成長して号出雲守時運、嫡子六兵衛時秀之流也。内記六代。

一、種子嶋伊兵衛時壽家之事

右六兵衛時秀妹、南郷久八忠吉生、忠清、忠吉死後、大守家久卿、光久卿為御局、賜新地三百斛、依光久公命、時壽祖母繼遺跡、實忠清子也。

一、肥後州於矢崎水俣、軍忠戰死之事、天正八年、大守義久公御代、嶋主久時代百十年。

一、肥前州龍造寺隆信嶋原御合戰之事

天正十四年秋、久時往々軍忠、嶋士九人戰死百四年。

高麗入之事九十七年

文録元年より至慶長四年、久時軍事不可勝計

一、所替之夏(事)

文録四年久時移知覽、慶長四年賜本嶋。是時嶋津典厩以移此地、家新地、忠興此嶋誕生。

一、屋久永良部兩嶋被召上事九十二年

慶長四年當嶋本復之時、兩嶋之儀(節)一節、有御借用之儀、居當嶋代官、奉鹿府公用有此年。

慶長十六年極月久時死去、忠時未生前、鹿府土嶋徒其直為公領御證文、慶長十一年燒失云々。

一、庄内弓箭之事

自慶長四年春至五年春。十二月八日、嶋士數十人戰死。九十一年。

一、関ヶ原御陣之事

慶長五年九月、當嶋軍士三人、於伏見御館戰死。

一、琉球入之事、八十一年

慶長十四年二月、嶋士數十人渡海。

一、御茶入号茄子進上之事

寛永六年大守家久卿、江十七代忠時。

一、當嶋御倉入、揚四千斛事

寛永十年秋也、是慶長末年、御分國中御芋有、此時嶋主幼稚也、家老以不勤、一萬四千斛。

檢地也、以老萬石為本高、四千石為御倉入敷、雖許之無許容、數年貢納、鹿府依理不盡。
漸々相違賜之

一、廻國上使御下嶋之事五十七年

寬永十年、屋久嶋与御浪海嶋間陸御通道赤尾木著。小出對馬守殿、城織部、能瀬小拾郎殿
以上

三人、鹿府御家老川上因幡守久國御供

一、忠時夫婦鹿府居住之事四拾七年

寬永貳拾年六月、光久公命也

一、將軍家忠時奉見事

寬永七年四月十八日、家光卿江江戶桜田館御成之時、同廿一日大相國秀忠卿江、寬永十八年五月十二日家光卿江、光久公使之同二十年九月十日家光卿江、右同断之時十一、五、數、天、云、
一、天下證人久時勤之事三十八年
奉為大守光久公、自承應元至同二年

一、法華經一部一卷進上之事

寬文三年、大守光久公江十八代久時

一、古今一部堯好筆一、唐繪一軸王照君胡國人進上之事

同年八月細久公江久時

一、將軍家久時奉見事

家綱卿江承應二年正月三日、證人之時

家綱卿江万治三年七月朔日、光久公御使之時

家綱卿江寬文二年九月朔日、右同断之時

綱義卿江貞享四年八月七日、繼貴公御家督時

一、嶋主年始、大守目見之事、古例者鹿府參上之時正月十一日、御太刀目錄進上、鹿府居住以後四日、以式日往古依無打籠進上、改席獨立御寒御寄合也、進年久時御家老役、依之御役
目并元日御太刀進上、家御太刀義時進上、式日

一、船大小數之事、嶋中

八十艘

内大船式十隻艘 但九端帆式里四枚帆迄
外八小船

一 鉄炮之事 嶋中諸士持筒

九拾一挺

六舟より
一舟まで

一 足輕持筒

但二男三男迄

一 嶋中士人数之事

赤尾木士 式百拾八人

諸村士 百九拾人

合四百八人

一 嶋中足輕之事

赤尾木并諸村式百式人 但二男三男迄
中間込

一 嶋中牧数之事

一 野間村之内 本増野 駄数式百四拾七足

一 油久村之内 大町野 駄数百五拾九足

一 嶋間村之内 崎原野 駄数百五拾五足

一 中之村之内 前田元野 駄数九拾三足

合四牧駄数六百四拾四足

一 嶋中寺之事 式拾八ヶ寺

但赤尾木并諸村迄

一 嶋中牛馬千百四拾足

但定請不増減、永代以定数致出銀等也

一 御國江上使御下之節、藏人持高一萬斛餘与被書出候

一 寶永五年子八月、増上寺火之御番御勤之節、増上寺役僧江、彈正高之儀者親藏人持一萬斛

餘与被書出候

一 藏人御役分地者不被下、心附為御役料米千式百俵、元禄八亥年、被下候

一 新小判小形 一兩式每四分懸り 十兩廿四分懸り
百兩式百四拾目懸り 千兩式實四百目懸り

相場直成
一、往古小判一兩二付

元録宝永共同仕候者

但當時通用之小判壹兩代、當時通用之銀を以七拾三匁相場之由三候ニ付十割増として百四

拾六匁

一、往古銀ニ而七拾三匁

一、元録銀ニ而九拾壹匁二分五厘

一、宝永始之銀ニ而百拾貳匁三分九厘

一、只今通用之小判壹兩ニ付

但三匁四匁

一、只今通用之銀を以、當時之相場七拾三匁

一、元録銀ニ而三拾六匁五分

一、寶永初之銀ニ而五拾六匁五分五厘三毛

一、慶長小判壹兩ニ付

一、慶長銀を以六拾目

一、只今通用之銀ニ而百貳拾目

一、元録銀ニ而七拾五匁

一、寶永初之銀ニ而九拾貳匁三分七毛

新金銀共ニ慶長ニ同シ

一、私売人ニ而御勝手方相勤候者、宝永七年寅二月より

一、私江横目頭被仰付候者、元録十二年卯三月二日、大野隼人殿御取次ニ而被仰付候、圖書殿

御当番江戸詰者、元録十三年辰正月十二日御供ニ而罷立、己五月六日江戸罷立、六月十八

日致下着候

一、右同宝永五年子四月十日、御供ニ而罷立、翌五月八月十五日、御供立ニ而致下着候

一、御勝手方江相勤候様ニ而被仰渡候者、宝永貳年酉九月九日、川上式部殿より直ニ被仰渡候

一、若年寄御役召被召替候者、寶永貳年酉十月十日、御休息之間ニ被召出、御直ニ被仰付候

一、京都ニ罷上候者、宝永二年酉十月十五日ニ被仰付候

同十六日罷立、同廿五日之朝致京着十二月三日京都罷立、同廿一日御当地江致下着候
一、御家老役被仰付候者、宝永七年寅六月廿八日、御座之間ニ而御直ニ被仰附候

但山栖様御役御免被仰渡候茂同日

一、出水地頭被仰付候茂、同日御同座ニ而肝付主殿殿^ト被仰渡候
右拂方之儀、年々出入御座候故、大抵之賦ニ而御座候

右之書附御字共除候而、御家老座ニ而書直一候。正徳四年七月之算用出、押札御内證御
見合、僧正ハ不遣候

不足高五拾七萬四千式百斛

内

式拾六萬千四百石 諸浮得を以相洛候

拾壹萬五百石

御判物高外增高を拂相洛候

三萬式千八百斛

道之嶋乃所務ニ而調申候

残而

拾六萬九千五百斛程之不足

右之不足高之分者上方御時借、又者先キ年所務を先納ニテ請取相調申候

一、出水叢中惣人数式千四百拾九人

内八百五拾人ハ人躰千五百廿九人ハ末子迄

六拾五人隠居

一、出水叢中高六千七百廿九石四斗九升九合七勺七才

一、御勝手方江相勤可申候由、被仰付候茂、於御同座主殿殿^ト被仰渡候

一、家督被仰附候者、宝永七年寅七月朔日、肝付主殿殿^ト御家老座ニ而直ニ被仰渡候

但山栖様御隠居被仰渡候茂同日

一、御家久之字拝領之儀、正徳式年辰六月十一日願申上、同六月廿八日御座之間ニ被召出、御

直ニ拝領被仰付候

一、八胡ニ御太刀進上并直馬進上之儀、正徳元年卯九月廿五日、肝付主殿殿^ト嶋津十郎左衛門

御取次ニ而被仰渡候

一 印判ヲ基能字ニ相改候者、正徳二年辰十一月廿一日、義岡佐平次殿取次ニ而肝付主殿殿江
 申出古印同人取次ニ而差出候
 一 御借銀元利合式萬六千八百七拾貫目

一 江戸御買掛銀千五拾式貫目
 御家老江戸往来持の道具

一 馬式足 一 沓籠一荷 一 具足箱一荷 一 茶弁当一荷 一 相附挾箱一荷 一 挾箱式荷内小附挾箱
 一 弓臺式肩 一 封鑑 一 笠笠 一 長刀近年減候
 一 鉄炮式挺 一 長徳 一 封挾箱
 一 玉葉箱老荷 一 葎箱近年被召留候 一 手道具
此式行大坂迄
 右之通被定置、未々之儀者、右ニ準可相減旨被仰出候。

辰六月
 一 萬石以上御家老旅、御賦主從六拾人
 一 播摩路小倉筋御供之御家老供御定

三拾式人

内若黨拾人 錢持式人 簀竿杯老人
 弓臺二面鉄炮二面一人 笠杯老人

具足箱杯老人
 封挾箱杯二人 後押老人

右外、茶、弁当、長持、挾箱、兩具持者、右之人數内ニ而、勝手次第ニ為杯申遍く候、
 外ニ駕籠廻り六人

右子五月十二日相定候
 正徳五年末十二月三日
 井上河内守様江被仰出候趣有之、同十二月十二日御申出之通減候様にと被仰渡候員數

一 進貢料新銀六百四貫目
 一 接貢料新銀三百式貫目
 一 吉貴公卯ノ御年 一 繼豊公己ノ御年

一 元祖信基より久基迄拾九代

一 肥後家者、元祖より二代目信式之四男左衛門尉信清肥後元祖

一 蒲生越前守光清之家を継候者、十二代之忠時二男茂清ニ而候

一 種子嶋権左衛門家者、十二代之忠時三男、出雲守時速元祖ニ而候

一 太守吉久公之御前者、十五代左衛門尉彈正忠左近將監入道可鈞時亮二女ニ而候

一 太守光久公御前、十六代佐近大夫入道一琢久時嫡女、伊勢大隅守貞晝室ニ而其息女

一 嫡家代々名、藏人、肥後守、大郎左衛門、四郎右衛門、中務左衛門、左近將監、左衛門尉、

對馬守、左兵衛尉彈正

一 久基 誕生 寛文四年^{甲辰}九月五日^{癸巳}

一 憲時 誕生 元録二年^{己巳}八月朔日

一 時春 誕生 元録四年^{辛未}正月十二日

一 時興 誕生 元録八年^{乙亥}五月廿一日

一 時純 誕生 元録十年^{丁丑}正月十日

一 於信 誕生 宝永三年^{丙午}正月十日

一 於慶 誕生 宝永四年^{丁未}二月廿三日

一 重時 誕生 天和元年^{辛酉}六月四日

一 時房 誕生 天和二年^{壬戌}六月廿一日

一 即存 誕生 貞享元年^{甲子}六月十日

金山之事

一 長野山ヶ野金山之基者、嶋津圖書久通御家老職以前ニ、私領邪答院宮之城内佐志村之川中

ニ而真砂を取揚候者有之、其真砂をゆひせ候得者、砂金有之候ニ付、此川上ニは金氣可有

之与存寄候ニ付、為可尋之石見銀山江為罷在内山與左衛門与、肥後國宇土郡半屋喜右衛門

を宮之城ニ留置、二三ヶ年之間曾木本城長野邊之山谷川まで経曆させ候之処、寛永十七

年三月廿二日、長野内村完賤谷川中ニ彼與右衛門、金取石を見附候与土中を掘き候ニ付、

圖書為堀出候砂金を捧 大守光久公江、御在府之時言上候、夫ニ付猶以可為堀由御謀候ニ

付、為堀之候而砂金三百両江戸江被差上被相調候之処、六月廿五日、伊勢兵部貞昌被為召、

猶々為堀進而御□候様にと被仰出候間、段々堀之也、同十八年八月廿八日、砂金九百八拾兩餘被献候、翌拾九年正月十四日、金山と被成給候旨被仰出、奉行北郷佐渡久加、自他國之人敬式萬餘人相集仰渡成、今者在山堀出金不可勝計、道程一里餘、山坂之越大陽奈原郡横川之内山ヶ野まで、一圍ニ柵を結ひ、其中ニ堀候、依之薩州長野、隅州之山ヶ野、西國之坑白仁田 与申所ニ杭木有之事

一 寛永廿年之春天下飢饉、人民恹候折節ニ而、金山堀候儀被差留候旨、被仰出被相止候。然
処ニ御借銀式万貫目ニ及、御返濟之御手便無之候ニ付、再金山御免之御願、松平隠政守様、
神尾備前守様、御取持を以被仰上置候処、明曆二丙申年五月、嶋津市正忠廣、鎌田源左衛
門政有御城江被為召、御免之旨被仰出候処、同年十一月と閣開候。此時より寛文年間まで、
奉行嶋津圖書久道、後ニ嶋津帶刀久元、新納又左衛門久了、肝付主殿久兼、平田新左衛門
宗正相勤之事

一 芥ヶ野金山之儀、萬治三年頃向見山堀被仰附候由、山先申候、山繁榮之時分凡人教七千人
ニ及候由申傳候。然処ニ漸々山衰、至天和貳年成ニ被相盈候御事

一 鹿籠金山向見堀、天和三年まで相始り候、且又芥ヶ野も、元録十一年寅酉金山堀之儀被仰

出速々被召立事ニ候、是者諸國山堀候様にと、公儀仰渡之趣ニ付、急度被仰付候事

萬治二亥年中

一 王金四百九拾八貫貳百九拾九匁六分 山ヶ野金山

宝永元申年中

一 同 五拾五貫百五拾貳匁七分 鹿籠金山

同六年丑年中

一 同 拾貫四匁七分 芥ヶ野金山

唐船漂着之事

一 米百五拾壹斛餘

一 銀拾貫九百九拾目餘

但唐船志艘七嶋宝嶋へ漂着、長崎へ被差送候入目

右宝永六年丑三月御勘定□と綱帳相調へ異國座へ差出候帳面之表

御城圍録

一 元録九年子四月廿三日之晚八ツ時分、伊知地休右衛門下人清右衛門上行屋、和泉屋町堅山
助右衛門裏屋ニ罷居候、其家より出火東風烈ニ而御本丸焼失候、御下屋敷御産所、御殿、

護摩所、諸役座、銀座、出物藏、御普請方無別条候

一、士屋敷五拾四ヶ所 但家八百五拾六

死人志人新納次郎四郎下人

一、町屋敷貳百拾三ヶ所 但家五百五拾五

一、御城御作事、宝永三年戌二月十日御取附

一、御城成就越打翌年亥七月四日

一、御家中幕惣目印、上六寸下七尺横筋紺染中目分紋所地色ハ心次第

右之通被相定候間、此以後新敷幕相調候節者、惣目印相調可申候。尤持合候を新敷作替

申儀ニ而ハ無之候。

御賦重之事

一、正徳二年辰年より四ツ宝、銀廿五匁ニ被仰付候。

一、正徳六年申年より四ツ宝、銀三拾目ニ被仰付候。

一、享保三戌年十一月四ツ宝、銀六拾目ニ被仰付候。

一、享保六丑二月与新吹銀 貳拾目ニ被仰付候。

一、享保元年申九月十六日 大守吉貴公江戶 江御参府之御礼之筋 公方吉宗公江御城黒於書院

久基御目見得、時服三、御太刀銀一枚之馬代進上、御養者番牧野因幡守英成様、松下薩摩

守家兼種子嶋彈正 与御披露支度尉計目長上下。

一、右同日、御老中土屋相模守様、井上河内守様、阿部豊後守様、久世大和守様、戸田山城守

様、各御年寄、大久保長門守様、大久保佐渡守様、森川出羽守様 江、御太刀銀一枚之馬代

持参ニ而、御目見得之御礼申上候。御留主居阿多六郎右工門殿案内。

一、武具 馬具 錫 鉛 硫黄 但錫鉛ハ番ニ作候 儀ニ不罷成候

右五品、廻船又者大坂早駄船より江戸 江差上ト候儀、又者江戸より差下候儀迄御禁止ニ

而候、承不差越候而不叶節者、願出下田御奉行様被聞召、御免之上差越事ニ候。

一、享保元年申七月より同二年丙八月迄江戸詰并往来道中惣入用之銀之拳

合八拾八貫八百貳拾三匁四分五厘五毛 但御賦銀 外也

外拾三貫九百廿五匁者、四郎助権四郎同道入目

一、享保二年西四月五日、鳥井丹波守様御妹於茶様与、御附人奥役人佐久間九右衛門御使ニ而、
遵師様御筆御守致拜領候、此御守者先年真修院様江久時様より御進上之由ニ而候、依之被
返下之由ニ候、御口上ニ而候、且又象牙之御本尊一懸、右之御守箱ニ入有之候間、是茂致
拜領候由ニ而被成下候。

一、享保二年三月十六日芝御屋敷ニ而、將軍宣下為御祝儀、御老中并各御立寄其外段々之御役
人様方、御招請ニ而候、彈正事御上客土屋相模守様、御蓋被下御看迄被下候。

一、同月廿二日、御座間江被召出此節將軍宣下御祝ニ御用掛被仰附候處、首尾好相濟候与御意
有之、比志嶋隼人殿より御目錄拜領被仰付候由承、平岡八郎太天殿取次ニ而御目錄頂戴仕
候、但六枚

江戸ニ而御家老供廻リ
一、先供五人 一、馬廻四人 一、挾箱式ツ
手道具志本一、笠志ツ 一、合羽籠 但天氣ニより増減
可有之候

一、供押式人

大口之種子嶋清右衛門殿与宮内并助殿頼系圖覺護不致候間、書調遣たく大望存候由被申間、
書写致添出、享保四年己亥二月十八日ニ清右衛門嫡子、同氏喜三衛殿二男喜左工門江相渡
候、留者記録方ニ有之候。

一、享保三年戊七月二日ニ種子嶋拾郎右工門殿、別立之願申出候處ニ、同八月廿五日願之通別
立被仰付、式百八拾石餘之高、願之通二十郎右工門殿高二被仰附、家格代々小番ニ被仰付
候、北郷作左工門殿當番直ニ被仰付候。

一、比志嶋隼人殿ニ而御内意申上候者、私二男三男共、相應之縁與共為仕候而者、身代之障ニ
被成事ニ御座候、依之存候者、本妻為持申間鋪候、妾ニ而相濟可申与存候、就夫ニ存候者、
鹿兒嶋士之別而小身者之娘と仕候儀者不苦事ニ可有御座哉、此段難究事ニ御座候間、隼人
殿与御同意ニ而、御伺被下候之由申置候処ニ、違貴聞成程可然候。鹿兒嶋士之娘妾ニ仕候
儀者如何之事ニ候得共、彈正杯者格別之儀ニ候間、不苦事ニ候。乍然鹿兒嶋士之娘者、御
内意申上候筋可然候。外城象中之儀者夫ニ茂不及苦候由、御意之趣隼人殿与承候。

一、私三男四男者、末御目見得不仕候、私宅御光儀之節者、御目見得仕候（共□与願申候而者、

御目見得者仕不申候。私存候者、子共刃候得ハ一々御奉公為仕候事者難成、二男之儀ハ御先代御直元服仕候、三男四男之儀者誰そ養子共ニ仕候ハ、遣可申候、左茂無之候得者、家来共ニ可仕与存候、然共寛陽院様御孫ニ候得者、私自儘ニ家来ニ仕候儀者、遠慮茂御座候間、先御目見得共不為仕召置、孫共之儀者、漸々家来共召成外無之候与存居候。依之御目見得願候儀者延引仕候、いつ連得与了簡仕漸々者相究可申候、右之了簡ニ而御目見得不奉願事ニ御座候、御目見得仕候而者、最早近々ニ罷成候必其身共ニ而家来共ニ者難成若候間、先何与な一に召置申候、此旨卑人殿迄御吐申置候由申置候得ハ、被達貴聞了簡次第ニ可仕候被聞召置候由、卑人殿与承候。正徳五年未十二月廿六日

御國道中

享保五年子六月
一泊 新銀一兩 一休 中紙式束

小倉并中國道中

一泊 新銀貳兩 一休 新銀壹兩

東海道

一泊 新銀貳兩 一休 新銀一兩
一 新銀貳兩ツ、御本亭見廻之節

箱根獵師

伊勢御炊大夫

熱田社人

其外右之者ニ新銀貳兩ツ、

一 椎木庭石其外植物道具之類、廻船より積廻し不申候様にと、享保五子十二月被仰渡候。

一 享保六年丑六月九日、太守繼豊公御家督被仰渡、吉貴公御隠居被仰渡候。

一 同六月廿八日 繼豊公御家之御禮之節、公方吉宗公江御白書院ニ而久基御目見得、時版六、

御大刀、銀一枚之馬代、御目錄進上、御葵者番三浦志岐守朋敬様御披露、松平大陽守家来種子嶋彈正与御披露、支度浅黄紺染出し紋帷子下ニ晒着用長上下。

一 同日、御老中井上河内守様、戸田山城守様、水野和泉守様、若御年寄大久保長門守様、大久保佐渡守様、石川近江守様、京都所司代松平伊賀守様江、御太刀、銀一枚馬代、御目

録進上ニ而御禮ニ参り候、御留主居森川利左工門殿案内。

船積遠慮之分

- 一 石手水鉢
- 一 砂利
- 一 湯風呂
- 一 太鞆
- 一 鞆
- 一 笛
- 一 琴
- 一 三味線

- 一 碁盤碁盤
- 一 双六盤
- 一 鳥籠之類
- 一 土附之芝

以拾式色

右之品々遠慮被仰付候

船積不苦物之覚

- 一 爐
- 一 七輪
- 一 茶臼

右者去九月九日ニ御用捨被仰渡候

- 一 のほりかぶと
- 一 ひな
- 一 菖蒲刀
- 一 は濁弓
- 一 数寄屋道具
- 一 石磨

右之分者表立通ニ而茂不苦候、其外者吟味之通可被相心得候。

五月十二月

右之通寅五月被仰渡候

一 江戸御留守居被仰付、享保六 五三月十五日、御國罷立同七年寅七月十三日下着

一 享保六 五六月九日 吉貴公御隠居御願之通被仰出 経豊公江御家督被仰渡候

一 同日廿八日御家督之御礼被仰上候ニ付御家来九人 吉宗公江御目見被仰付候、久基御目見被仰付候、献上物、御太刀、銀一枚之馬代、時服六、御披露三浦志岐守明敬様

一 享保六 五年より同七 寅年迄江戸詰入用銀

惣合新吹銀七拾四貫六百五拾五匁五分貳厘一毛二帯

内廿四貫九百一匁四分七厘五帯 御賦銀

四拾六貫三拾八匁七分一厘三毛八帯 自銀

久基江大御支配之御用係被仰付候事

一 享保七 寅九月四日、御城御座之間ニ而経豊公御直ニ被仰付候、御領國中大御支配被仰付候

御用係被仰付候、委細者御書附を以被仰渡候由ニ而御直ニ御書付被下候、右御書付左ニ記ス

國中大支配此節可申附候、此儀者 綱州様御家督内ニ被仰附思召茂為有之事候へ共、御

隠居被遊候ニ付而、今度右之通申付儀ニ候、依之其方儀右用係申付候條随分精を出し可

相勤候、尤手廣く相掛ル事ニ而急ニ不相濟筈ニ候へ共、いつ連大支配相濟様ニ無之候而
不叶儀ニ候条、其心得ニ而折角申談可然候、右ニ付而大目附菱刈藤馬、勘定奉行堀甚左
衛門、申付候条萬端可申談候、家老中ニ茂油断無之様にと申聞候条、段々下役等之儀者、

見合之可申附儀ニ候以上、

一、享保七、寅年被仰渡候御上納米之事

七拾貳萬九千五百斛

高壹萬石ニ付米百石宛之御上米

合米七千貳百九拾五石

御國內御賦

一、主従三拾式人 御城代

一、乘馬壹足 萬石以上御家老

右十里外遠方

一、主従貳拾式人 右同

一、乘馬壹足

右拾里内近方

外ニ人足并駕籠かき馬よりく 左之通

一人足八人 但馬之口引一馬八足 御城代並萬石以上御家老

一人足三人 但駕籠かき

一、山榎様御隠居七拾二御年室永七、寅年

一、久基家督四拾七之年室永七、寅年

一、享保七、寅年高輪御作事入目金

小判金壹萬四千五百五拾七兩三部

銀ニ、八百四拾九貫四百六拾五匁

外ニ銀貳拾九貫四百八拾貳匁

米貳百四拾七石九斗四升

右式行御作事ニ付、御國より被召上候人数、道中船中御賦、并飯米江戸地賦、飯米江戸

江詰居候人数、御普請方江被召仕候人数、足輕人足下御賦飯米

一 騎馬高持士式百四人

一 一萬斛以上五人

一 七千石以上三人

一 五千石以上五人

一 千石以上廿五人

一 五百石以上三拾五人

一 貳百石以上百三拾五人

一 入五三人

一 入五八人

一 入五八人

一 入五八人

郷土資料集 六

「我目分明記」

昭和五十九年三月一日発行

西之表市立図書館